

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
〒606-8202  
京都市左京区田中大塚町49  
075-701-3164

## ポスト工業化文明とエネルギー

四国支部長 近藤 耕三 (昭28年卒)



たとえばこんなことである。

戦後、日本政府は電気事業の復興と発展に相当の努力を払い、電力会社の先輩達は電源開発や送配電線の建設に奮闘した。それが、当時奇跡と言われた日本の復興を支えた要因の一つであったことは疑いない。

○種々の会合の挨拶の中で「電気は今や社会に欠かせないものでありまして」という言葉を聞くことが多くなったのは、もう30年前のものであったらうか。

その度に、「そんなにはつきり言い切れるのかな？」と内心ひっかかるものを感じてきた。江戸時代には存在しなかった電気エネルギーが何時の間に？どうして？社会に不可欠になったのか、という程度の他愛のないものではあるが、社会とエネルギーとの関わりを、折に触れて考えるきっかけとなってきた。

いていたのは、日本、韓国、台湾の3ヶ国と言ってよい。原子力まで動員したという点において、電力供給安定化に対する意気込みが、他の国々とは違っていた。そして、それから20年後、この3ヶ国が先進国の仲間に入った。

○これらの事実は、電気の充分な供給が社会の発展、つまり文明の興隆に少なからず寄与したことを示すものと解して差し支えないであろう。全国津々浦々に送配電網を張りめぐらせ、いつでも、どこでも、どなたにでも、電気エネルギーの利用可能な状態をつくり上げれば、社会は持てる力をフルに發揮して成長発展すると言っても、あながち的外れではないのではあるまいか？

最近読んだ森本哲郎著「文明の主役」は、こうした私の憶測に支援の手を差し伸べてくれそうである。この本には「エネルギーと人間の物語」という副題がついており、世界各地を訪ね、歴史を辿って、エネルギーと文明とのかわりを克明に追った一冊である。この本によれば「エネルギーを投入し出来上がった仕事は文明そのものである」。電気エネルギーを投入し出来上がった戦後の日、韓、台の仕事は、正しく工業化文明であった。3ヶ国に違いは見られない。エネルギーは文明を規定するのである。

○ところで、鬼頭宏著「人口から読む日本の歴史」によると、日本人口の増減には、以下の4つの波が認められるという。それぞれの波はロジスティック曲線と呼ばれるS字形の増加、停滞曲線で表すことができる。

第1波：縄文時代の人口増減

第2波：弥生時代にはじまり、13世紀につづく人口増加・停滞

第3波：14世紀にはじまり、18世紀につづく人口増加・停滞

第4波：19世紀(幕末期)にはじまり、21世紀につづく人口増加・停滞

このうち第2波は稲作農耕への農業革命がもたらした人口増加であり、第3波は、これに市場経済が加わって活性化した社会がもたらした人口増加である。いずれも農業文明に拠る人口波動である。これに対し、第4波は産業革命以降の工業化によってもたらされたものであり、工業文明に拠る人口波動である。

農業文明と工業文明を支えるエネルギーには明らかな違いがある。すなわち、農業文明を支えるエネルギーは太陽エネルギー起源の生物的なフローのエネルギーであって、一度に多量の消費はできないが、枯渇せず、地球環境に対して本来、親和的である。「本来」

というのは、薪炭や建材として一度に多量の木を伐採し、森林を荒廃させ、枯渇させてしまった西欧の前例があるからである。一方、工業文明を支えるエネルギーは化石エネルギーを主体とする非生物学的なストックのエネルギーであって、一度に多量の消費が可能であるが、枯渇が避けられず、環境に対して親和的でない。

このような視点に立てば、世界中が工業化に向かう現在、地球環境問題の深刻化は極めて必然的である。

日本社会では、まず、人口が幕末後約150年の間に4倍増となり、食糧やエネルギーの自給体制は崩壊し、完全な外部依存型に変わった。日本人口を支える産業はもはや農業ではなく、工業である。

そして、工業化への適応過程において日本社会は大きく変容し、今なお、変容が続いている。都市化、核家族化、少子化、高齢化、単身世帯の増加等々の過程がこれであり、結果、皮肉にもつるべ落としの人口減少が迫っている。一方、1000年を超える長い農業文明の時代に形成されていた里や村落、イエ社会などの基本的な社会

構造は急速に消滅しつつある。

○過去の人口波動から見ると、人口減少に向かう昨今は、第4波の人口停滞期に当たり、日本社会にとって、次の文明、すなわちポスト工業文明を探し求める一種の混沌期にあるのではないかと考えられる。

混沌期の前例を歴史上に求めると、当然幕末期が想定されよう。

幕末期をどう見るかは難しいところであるが、幕府の統合力が弱まる一方で、大阪商人や江戸職人に代表される民間の数々の新しい試みが明治維新後の工業化へのアプローチを創り出したという視点に立てば、現在、国内外で多種多様な活動を行っているNPOやNGOの動きの中からポスト工業文明へのアプローチが、徐々に、いつの間にか形づくられて行くのではないかと、と連想される。

エネルギー面ではどうであろうか？電気エネルギーが、現在以上に使われることは確実であろうが、その供給システムはどうなるであろうか？

20世紀は石油と電気の世紀であったと言われる。中でもエジソンが提案した配電網による電気エネルギー供給システムが20世紀の工業文明を強力に成長発展させたことは戦後の日本が立証した。このシステムはポスト工業化文明下においても、文明を支え、文明を規

定するエネルギー・システムとして生き残るのではないかと、配電網から独立して、高品質の電気エネルギーを供給する装置が開発されるにしても、相当な時間がかかりそうだが、などと想像をめぐらす今である。

### 教室だより

#### 桂キャンパスへの移転

電気系移転ワーキンググループ委員長

電気工学専攻

教授 奥村浩士(昭41年卒)

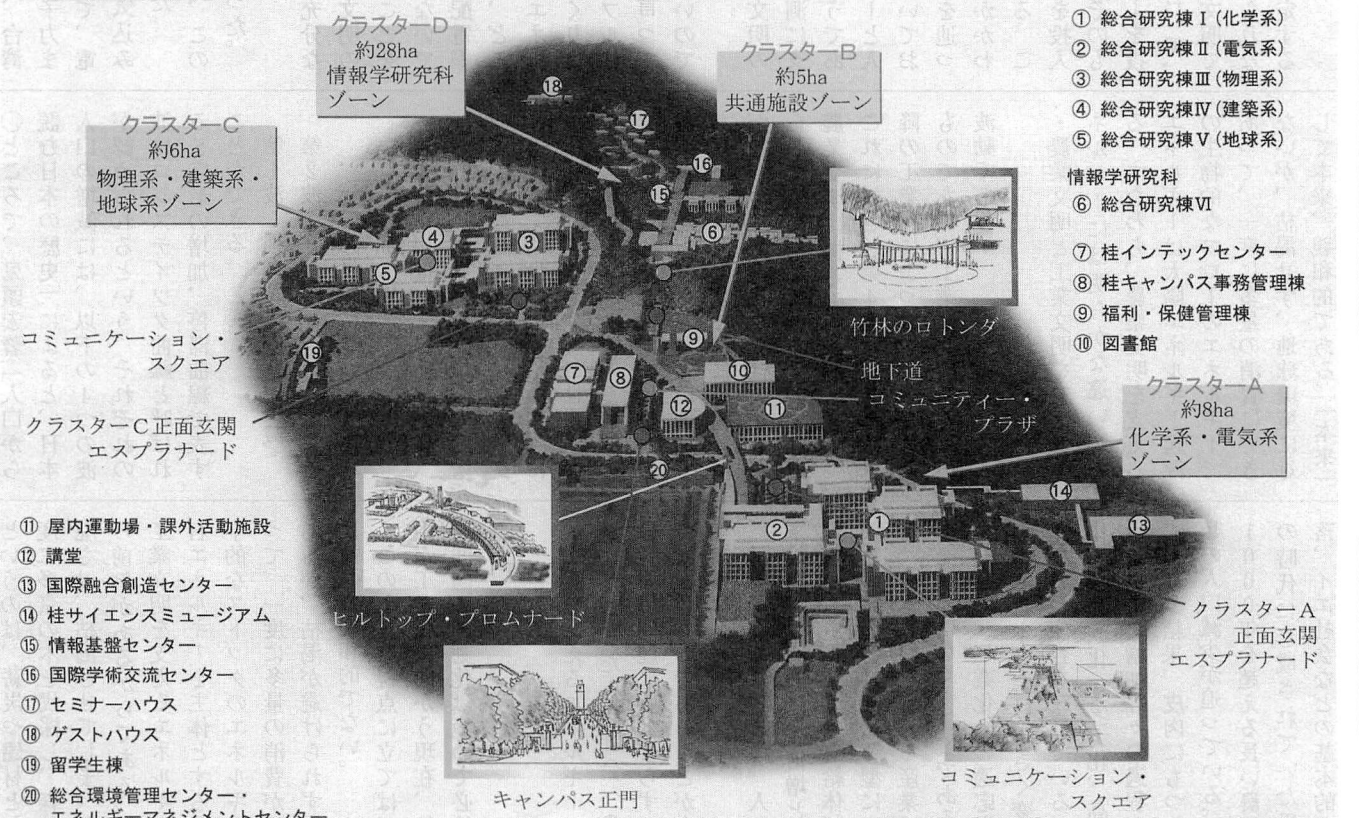
会員の皆様には新聞等でご存知の方もあるかと思いますが、京都大学大学院の工学研究科と情報学研究科の桂キャンパスへの移転が平成11年9月の評議会において決まりました。本稿では新しい桂キャンパスの概要と移転のあらましなどを手短かに述べて皆様のご参考に資したいと思っております。

現在、京都大学における21世紀の工学と情報学の研究・教育活動の新しい場となる桂キャンパスの造成が着々と進んでいます。電気系教室もすでに移転の実施計画など具体的な作業にはいっており平成15年に桂キャンパスに移転することになっていきます。

桂キャンパスは京都の西方、丘陵地の桂御陵地区に建設され、完

成すれば敷地総面積約47ヘクタール、学生・教職員数約三二〇〇人の大きなキャンパスとなります。このキャンパスの目指すところはテクノロジータウンとサイエンスが融合する「テクノサイエンス・ヒル」の形成です。ここでは「技術」「地域」それに「自然」が高度に融合かつ交流し、21世紀に工学と情報学に要請されてくるであろうさまざまな課題に応える環境を創造してゆくことが求められています。また、学際交流、国際交流、産学協同の場として既存の研究分野の枠を超えた活動により、学問の新分野を生み出すことはもとより、先端技術の実験フィールドとしてキャンパスを捉え、新学問創出の仕組みについても考えていきます。さらに、地域社会

### ●桂キャンパス



#### 工学研究科

- ① 総合研究棟Ⅰ(化学系)
- ② 総合研究棟Ⅱ(電気系)
- ③ 総合研究棟Ⅲ(物理系)
- ④ 総合研究棟Ⅳ(建築系)
- ⑤ 総合研究棟Ⅴ(地球系)

#### 情報学研究科

- ⑥ 総合研究棟Ⅵ
- ⑦ 桂インテックセンター
- ⑧ 桂キャンパス事務管理棟
- ⑨ 福利・保健管理棟
- ⑩ 図書館

- ⑪ 屋内運動場・課外活動施設
- ⑫ 講堂
- ⑬ 国際融合創造センター
- ⑭ 桂サイエンスミュージアム
- ⑮ 情報基盤センター
- ⑯ 国際学術交流センター
- ⑰ セミナーハウス
- ⑱ ゲストハウス
- ⑲ 留学生棟
- ⑳ 総合環境管理センター・エネルギーマネジメントセンター

※図は基本計画に沿って作製した全体計画のイメージ図です。

との協調も桂キャンパスの大切な課題であり、一般市民にも利用できる施設の導入、地域との産学連携、ベンチャー支援など大学の社会貢献の具体化を図ろうとしています。桂キャンパスは住宅地に隣接した丘陵地に建設され、その一部は竹林に覆われます。そのため、環境マネジメントに力を入れ、ISO14001認証取得キャンパスを目指し、自然環境調和型のキャンパスとして景観に新たな魅力を加えるよう配慮するとともに、自然との対話により創造性を刺激するキャンパスとなることにも重点をおいています。

さて、桂キャンパスはどのような設計になっているのでしょうか。図にその概略が示されています。工学研究科はクラスターA（約8ヘクタール）、B（約5ヘクタール）、C（約6ヘクタール）に分かれ、情報学研究科はクラスターD（約28ヘクタール）に属します。電気系と化学系はクラスターAに配置されています。現在、クラスターAの総合研究棟（Ⅰ）の三つの建物（化学系）と同（Ⅱ）の一つの建物（電気系とイオン工学実験施設）およびクラスターBの一部の建設が進んでいます。桂キャンパスの正面玄関はクラスターBにあり、そこには正門と時計台が配置され、コミュニケーションプラザ、図書館、総合事務棟などがキャンパスの中核部を形成しま

す。桂キャンパスでは情報インフラにも力を入れています。キャンパスでは情報基幹ネットワークとして、有線、無線の通信系を統合したインフラ網を構築し、吉田キャンパスと宇治キャンパスを超高速度専用回線で接続することで空間の制約を受けないマルチメディア環境が提供され、これらを最大限に活用した教育・研究環境を提供することができま

す。平成15年から電気系2専攻（電気工学専攻と電子物性工学専攻）それに付属イオン工学実験施設と化学系6専攻が先発隊としてクラスターAに移転し、その後数年かけて物理系（旧機械系）、建築系、地球系（旧土木系）が、そして最後に情報学研究科が移転する予定

です。さて、移転の先発隊となった電気系2専攻およびイオン工学実験施設は平成12年4月から各研究室の主として若手教官からなるワーキンググループが組織され、実施計画の作業に入り平成12年8月上旬のヒアリングを終え、第一ステップを乗り越えました。この5ヶ月間に、何回もの会議を重ね、建物新営設備に関する膨大な資料が整えられました。さらに、平成13年2月から5月まで移転費の概算要求のための多くの資料が作成されました。これらの資料作成には多大の時間が費やされましたが、

各研究室の教官や院生ならびに事務職員の方々のご理解と献身的なご努力により無事この困難を乗り越えることができました。

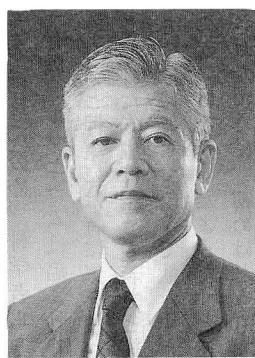
電気系の研究棟は地下1階地上4階建てのビルディングで、教官室を含めて1研究室280平米が割り当てられています。文部省からの要請もあり研究室は独立した個室をできるだけ避け、間仕切りをできるかぎり少なくし、研究者が相互に容易に移動できるよう配慮がなされています。また、教官室や院生の控え室などは天井を高くして窓からできるだけ自然の光を内部に取り入れるよう設計されています。

一方、桂移転後の学部教育が大きな問題です。「学部教育は吉田地区で行う」という大原則があり、教官は桂と吉田の両方のキャンパスを掛け持ちしなければなりません。最大の問題は吉田から桂に移動するのに少なくとも一時間は優にかかるといことです。このため、これまで行ってきたカリキュラムや時間割を見直す作業がすでに始まっています。研究室に所属する教官と大学院生・学部学生が一同に会する日を最低週一日確保するために、カリキュラム委員会では複雑な時間割編成の作業がおこなわれています。最後に交通アクセスを記します。最寄りの駅は阪急電鉄京都線・桂駅です。京都四条河原町駅

から約10分、大阪梅田駅から約40分であり、JR京都駅からは地下鉄で四条駅まで出て、阪急に乗り換えることとなります。阪急桂駅からキャンパスまでは直行バスが運行される予定になっています。ともあれ、京都大学の21世紀の工学と情報学の研究・教育の拠点として最初に完成するクラスターAにご期待をいただきたいと存じます。

### 退官にあたって

池田 克夫（昭35年卒）



36年間勤めた国立大学をこの3月末で停年退官した。学生時代から40年間、第1世代の計算機から今日に至るまで、ずっとコンピュータの成長ぶりを身をもって体験してこることができたことは誠に得難い貴重な経験であった。大変幸運であったとつくづく思っている。そのような環境を与えて下さった恩師、先輩、友人に心から感謝申し上げる次第である。記憶容量が4000語のドラマ

式の計算機から一つのパッケージに1000万個近いトランジスタがぎっしりと詰まった超LSIでできた最新のノート型PCに至るまで、実に多くの目まぐるしい発展が目の前で繰り広げられていったのである。今の学生諸君にドラマ式の計算機など想像できるであろうか。1960年代には磁気ディスクが登場したが、直径が40cmにもなるような大きな円盤が回転してその容量がたった数100kBであったなど、今日のDVDが直径わずか12cmで8GBもの容量を持つのに比べて月とすっぽんのような違いである。

このような経験は今の学生諸君には最早できないであろう。その代わりに、高性能のコンピュータを駆使して思う存分新しい世界を作って行くことはできるのである。それはなんとすばらしいことか。

私の子供時代は模型作りの大好きなラジオ少年であった。そして京都大学工学部電子工学科卒業以来、生まれたばかりの電子計算機と共に私自身も歩んできた。もの作りを好むことはその後でも変わらなかった。計算機システムやコンピュータネットワーク構築から、情報工学科や大型計算機センター、総合情報メディアセンタ、情報学研究科の創設まで、さまざまの作りに関与させて頂いた。会社などでのもの作りとは違

うであるが、やはりできたときの喜びは同じようなものであろう。

大学では様々な分野の人たちと交流することができた。そして感じたことは、環境と人の性格とは、どちらが原因でどちらが結果かは分からないが明らかに関連があるということである。

電気・電子回路は1カ所でも論理や配線に誤りがあると正しく働かない。1000万個のトランジスタを組み込んである超LSIでも1ヶ所のトランジスタが故障したらおしまいなのである。このように電気の分野では、論理の正しさと信頼度という面からとんでもない精度と品質を要求されるから、緻密で正確であるがどちらかというと話が細かくなってゆく。逆に大づかみな話が苦手である、というような傾向があるようである。

数学の人は、論理に強く、あくまで論理にこだわるようであるし、土木の人は、コンクリートの材料の砂粒を一つずつ詮索しても始まらないことから大局的な判断に優れる。農学の人は1年で作物の品種改良などできるわけがないから、長期の見通しを大事にする。化学の人は、直観的・定性的な判断に優れるが、どうも数理論理的に詰めるのは苦手の人が多いように見える。

大学に入学した最初の1年は宇治分校に通ったが、2回生以降は、

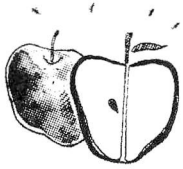
京都を離れていた11年間を除いて32年間、本部構内のある百万遍に通った。昔の写真を取りだして比べてみても、大学の建物はコンクリート造りとなりそれが25年以上経ってややくたびれた感じはするが大学封鎖のときに実に異様な姿になった以外は、さほど大きな変化を見せていない。百万遍という所は、ここに集まる人たちが選りすぐりに人たちがばかりで特別なスポットなのであるということをつくづく感じる。このようなところは世界中でもごく限られている。私の人生も百万遍を起点としていたのである。

明治以来京都は大学と共にある街だった。とくに京大生は京都の町では大事にされたし、京大の先生は尊敬されていたように思う。地方の中小都市でもこのようなことはあるようであるが、他の大都会ではこのようなことはない。東京や大阪では全く経験できない。工学研究科と情報学研究科が桂坂に立地することになるが、依然京都と共にあることには違いがない。百万遍界隈の学生の街の姿が何時までも存続することを願うのである。

研究費の獲得額、各界において活躍されている方の数、等を比べると京都大学の地盤低下が気にならざるを得ない。京都大学気質というか、京大以外の人からいつもいわれることは、京大の人は、個

人としては大変優れているが、お互いに協力することがなく、チームを作れない。お互いに助け合い引つ張り合うことがなく、逆に足を引っ張ることをしているから損ばかりしているというのである。学生に対しても様々な機会に、人のネットワークの重要性を話すがあまりよく分かってもらえない。よくいえば、自由な気風なのであるが、外野にいて批判ばかりしているも仕事ができることにならない。やはり、互いに力を合わせながら、政策づくりから始めて、大きな仕事をしなければならぬと思うのである。こんなことを常々考えていたのではあるが、自分自身でもそれほどうまくやっていたとは思えないのが残念である。

大学の独立法人化の動きも急である。京都大学にとって必ずしも理想的な形態ではないかも知れないが、それでもこれまでに比べて改善される面も多くなるように、うまく運営して大いに発展するチャンスがあるものと信じている。どうぞ健闘していただき大いに発展されるように衷心より祈念申し上げます。



## 田中先生を偲ぶ

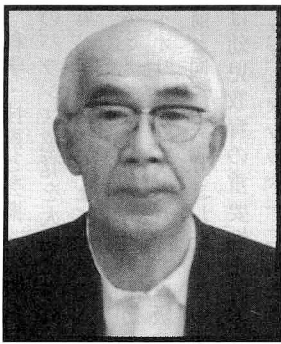
藤島 啓 (昭25年卒)

厳しい寒さの冬も終わって急に春めいてきた今年の2月20日に恩師田中先生は永眠された。11年間の奥さんの献身的な介護も空しく、静かに息を引き取られたという。84才であった。生来お元気だった上に日本山岳会会員として山を歩くために、毎日ご自宅から大学まで往復約6kmの道を歩いて体力の維持に努め、科学者らしく「有機ゲルマニウムは癌に効くよ」だ」と健康には特に気を使っていた。先生は、その若さと純真さの故に「ヒマラヤで飲みすぎたのがいけなかったようだ」と述懐されたように、初めはどうもなかった高山病が次第に悪化して半身不随となり、遂に声も聴けなくな

った。私が先生の門下生となったのは昭和24年3月である。大学3年の卒業研究テーマを選ぶために先生の研究室を訪問した。もう取り壊されて無くなっているが、現在の電気教室の外に作られた木造2階建ての小さな研究室であった。敗戦後の何もない時代なので暖房も無く、雑多な測定器が並べられた部屋の隅に先生は居られた。その時、先生が説明されたのは「日本人が発見した強誘電体―チタン酸バリウム―の研究」であった。内

容はよくは分からなかったが、新しい時代を予感して翌日から先生の研究室に入り込んだ。それから51年間の長い年月を先生とともに「チタン酸バリウムの研究」を続けてきたことになる。「チタパリの無限の発展を思うと足が震える」と言われた先生の夢は、何時か私の夢になってしまった。幸運というか、奇跡というか、とにかく私の人生の大部分は田中先生であった。

先生は学生時代によく理学部に行つて湯川博士の量子論の講義を聞かれたようだが、名著「チタン酸バリウムの応用」でも分かるように、先生は常に実際の応用を重視し、技術者としての道を歩まれたと思う。手先の器用さも素晴らしい測定用の治具はすべて自分の手作り、出来あがったものはその形といい、色合いといい、重さといい、芸術作品ともいえる立派なものであった。「手仕事をすると頭もスッキリするね」とよく言われた。それは新製品開発でのアイデアにも表れる。「物事を単純化しモデル化してゆけば、アイデアはいくらでも出てくる。」また「直感的に見ておかしものは何処かおかしい」との言葉通り、直感を大事にされた。バランス感覚は抜群で、常に真善美一体の世界を追求された。それはレオナルドダビンチや、ミケランジェロのような天才を彷彿するものであつ



(故 田中哲郎名誉教授)

### 田中哲郎先生を偲ぶ

京都大学 電子物性工学専攻  
松波 弘之(昭37年卒)

本学名誉教授 田中哲郎先生は、平成13年2月20日に逝去されました。享年84歳でした。先生の

た。

残念ながらそうした理想主義はアメリカナイズされた最近の日本の世相には合わなくなってきた。晩年は人嫌いから山に登る傾向も目立ってきた。私は会社を定年退職してから先生が出版された「アルプス回想」写真の道を通った。地球温暖化で氷河も交替し、便利になり過ぎて自然の迫力は薄らいだが、先生が求めたものは分かったような気がした。帰ってからお話しした時の先生の楽しそうなお顔が忘れられない。

お葬式には先生が愛用されたパイオリンと登山用ピッケルと写真集と、そして大好きなビールが飾られた。先生！ 安らかに眠り下さい。

ご逝去を悼み、慎んで追悼の辞を述べさせていただきます。

先生は、大正5年5月30日、小倉市にて誕生されました。姫路市大塩町尋常高等小学校、姫路中学校、姫路高等学校を経て、昭和14年、京都帝国大学工学部電気工学科を卒業され、同年、株式会社北辰電機製作所に入社されました。

ものごとの科学的探求を期して昭和17年京都帝国大学大学院(工学部)に入学され、1年半ほどの間、量子力学、物性論などをご勉学になりました。昭和18年10月に京都帝国大学講師(化学研究所)を嘱託され、阿部清教授のもとで、電気材料の研究に従事されました。

翌19年12月同助教授に任命され、主として、高周波誘電体材料の製法や測定法の研究を行われました。その後、チタン酸バリウム磁器の強誘電性について基礎的な研究を行われるとともに、これらの応用についても幅広く実験的な研究を展開されました。魚群探知機用超音波変成器をはじめ、圧電音叉、音片、フィルタなど先駆的研究を行い、圧電磁器応用の基礎を作られました。これらの成果を、論文「酸化チタンを主体とする誘電体と半導体の研究」にまとめられ、昭和26年7月に、京都大学から工学博士の学位を授与されました。

昭和27年2月、京都大学教授(化学研究所)に任命されて電気

材料部門を担任され、強誘電体ならびに半導体材料の研究に従事されました。昭和34年3月から約4ヶ月にわたり、アメリカ合衆国およびヨーロッパ5ヶ国へ出張され、強誘電体材料を中心とする電子材料の調査研究を行われました。

昭和38年4月、京都大学工学部教授にご就任、電気工学第二学科半導体工学講座を創設・担任されました。昭和46年4月には、電気系教室改組に伴って、電子工学教室所属となられました。この間、半導体の進展と相俟って多くの学生が研究室所属を希望しました。

昭和50年にはアムステルダム(オランダ)での「気相成長とエピタキシャル成長国際会議」、昭和53年にはサンタバーバラ(アメリカ合衆国カリフォルニア州)での「デバイス研究会」 「電子材料会議」に出席され、研究成果の発表をされました。

昭和54年4月、停年退官より1年早く、国立詫間電波工業高等専門学校校長就任を懇請され、当時としては1年早いというのは希なケースでありましたが、その要請を受けられました。同年4月に京都大学名誉教授の称号を受けておられます。校長職に在任の間は、管理・運営の重責を果たされま

とともに、もの作りの重要性を若者に伝えるため、電子材料に関連する資料館の建設に奔走されました。

た。昭和62年3月に同校長を退職されました。一連の研究教育、学会等での活動に対し、昭和62年4月勲二等瑞宝章を受けられました。

先生のご専門は電子材料工学であり、強誘電体、圧電体、半導体材料分野において数多くの論文を発表され、特許を取得されており、電子情報通信学会(関西支部長)、日本音響学会(関西支部長)、チタン酸バリウム実用化研究会(会長)、強誘電体応用会議(運営委員長)などの学会、研究会の役員を歴任され、わが国の電子材料工学とその関連分野における学術・技術の振興に多大の貢献をされました。

なかでも、チタン酸バリウムの基礎と応用に関しましてはその創始者であり、「チタン酸バリウムとその応用(オーム社)」を著しておられます。まさに、日本におけるこの分野の中心として、長く、学会、産業界を指導されました。

特に、村田製作所、村田 昭名誉会長との緊密なご連携もたれ、今から50年も前に、現代で言う産学共同・ベンチャービジネスの展開をされました。「ガラス分野で知られているアツベとツアイス」に近い関係を築かれましたことは、「驚異のチタバリ(丸善)」の本を通してつとに有名であります。著書で、「チタバリの将来の無限の発展を考えると足が震え

る」とまで書かれていますように、その情熱は科学者・技術者の先達として深い尊敬の念を覚えます。

昭和39年、修士課程修了時の私を研究室スタッフの一員としてお加えいただきました。爾来、京都大学をご退官されますまで15年間、日常業務、研究などで受けましたお考えは、「工学はデザインができればならない。材料をデザインするためには、物性を把握し、それを制御することが最も重要である」でした。それは、現代で言う「材料・物性のデータベースを構築し、制御してその材料の真の実用性を発揮させること」に言い換えることができましよう。

先生のお考えは幅広く、多彩な学生達に大きな度量で臨まれました。「研究テーマはやりたいことをやってもよい。しかし、それを展開していくためには、FundingやSponsorshipまで自分で考えよ」とのニュアンスを伝えられたように思います。「自分で考えよ」との厳しさを併せもたれていました。多くの門下生が各所で活躍してき

ましたが、在学時代に受けましたこのような薫陶がその後の人生の指標となっているものと確信しています。研究およびそれ以外の面でも「ものごとの本質を見極める」姿勢は、混沌の社会において、と

もすれば小手先で走ろうとする姿勢に対する警告であり、私どもへの大きな教訓であります。

勢に対する警告であり、私どもへの大きな教訓であります。

科学・技術と芸術(左脳と右脳)

のバランス感覚を大切にされ、音楽、写真、登山など、幅広い趣味をおもちでした。学生時代からバイオリンを演奏され、プロ級の腕前と伺っております。この面では幼児教育の重要性を説かれ、「スズキメソッド」に傾注された時期がありました。ご自宅の庭で何十種のバラを育てられ、シーズンには研究室員をご招待下さる機会もありました。健康食品の重要性を説かれ、有機ゲルマニウムや胡麻粒健康法など、一面ではたいへん人間味溢れる側面も披露していただきました。大学時代の後半では片道35分の徒歩通勤を励行され、山歩きのためのトレーニングを実行されました。高専の校長時代には、体育グラウンドでのジョギングを続けられ、校内名物になったとのエピソードも伺っております。

奥様とのヨーロッパ旅行を楽しまれ、数夏の訪問を基に「アルプス回想(山と溪谷社)」という写真集を発売されました。プロの写真集かと思わせる素晴らしいものであり、添付されている綿密な撮影データは科学者としての緻密さを如実にあらわしたものとさえいえます。念願のヒマラヤトレッキングにも挑戦されました。旅行記の後2、3冊出版したいとの強いお気持ちをお伺いしました。晩年は、「人間の脳の働き」に強い

興味を示され、私どもへも、「脳の仕組みが面白い。ここまで分かってくる。将来はきっとこの方向かも知れない」とその重要性を示唆しておられました。

ここ3年ほどは、足がご不自由になられ、奥様との2人3脚で切り抜けられておりました。平成12年5月に突然の発熱で入院され、一時は退院しておられましたが、昨秋再度の入院を余儀なくされ、年が明けた去る2月20日、ご永眠されました。

先生が人生において示されました足跡は、科学・技術を中核としながら、芸術など幅広い展開を實行されたもので、万人にはなし得ない素晴らしいものであります。その一部分でもお手本にできればと心から思う次第です。

田中哲郎先生、どうもありがとうございました。どうぞ安らかに眠り下さい。ご冥福をお祈りいたします。

### 洛友会京都大学電気百周年記念事業決算報告

昨年度の事業としては、母校電気関係教室の研究のアクティビティを関連企業に紹介するための情報誌「Cue」の5号、6号を予定通り発行し、賛助会員はじめ、百周年事業に協賛して頂いた大部分の方がたにはお送りしました。

昨年の洛友会報190号にも記載しました通り、現有の基金を有効に活用して、電気系教室と企業との産学協力を支援する活動を続けて参ることにしております。ご理解とご支援を宜しくお願い致します。なお昨年度の賛助会員は日本アイビーエム、関西変成器工業(2口)、鉄道情報システム、日立電子エンジニアリング、島田理化学業、横河アナリティカル、西日本電気システム、ダイキン工業の8社9口でありました。賛助頂きました各企業に感謝し、引き続きご支援をお願い致します。決算の監

### 平成12年度収支計算書 平成12年4月1日～平成13年3月31日

#### 収入の部 (単位:円)

賛助会員	900,000	企業8社
利息収入	41,074	定期利息
収入合計	941,074	
前期繰越収支差額	47,089,155	
収入合計	48,030,229	

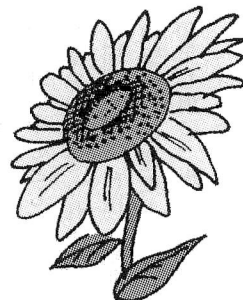
#### 支出の部 (単位:円)

事業費		
創立百周年誌刊行事業費	87,459	
Cue刊行費	2,406,400	Cue No.5印刷発送費1,182,993円 Cue No.6印刷発送費1,223,407円
管理費		
事務委託費	1,200,000	
通信費	55,257	電話・切手代
支出合計	3,749,116	
次期繰越収支差額	44,281,113	
支出合計	48,030,229	

平成13年6月11日  
上記収支計算書を確認しました。

署名人 松波弘之

査は6月11日、電気系教室の松波弘之教授にして頂きました。  
記念事業幹事代表 木村磐根 (昭30年卒)



### 会員寄稿

#### 戦中派の学生生活(Ⅻ)

会長 近藤 文治(昭18年卒)

(夕) 研究室の混乱と

鳥養先生の決断

私は大学院の学生であったが、研究室には若い男女4人の職員がいて、先生の言で実質的には私の研究の手伝いをして貰っていた。いわば私の部下である。その手前、私には突然自失ということが許されなかった。天皇の終戦の大詔を聞いて研究室に戻り、続きの放送で終戦を確認した瞬間から、4人の部下に対する対応を余儀なくされた。

「近藤さんどうしたらよいのですか。これからどうなるのですか。」と絶り付かれた。何かを指示しなければならぬ。混乱する頭の中ですぐには答は思い浮かばない。しかし何かを言わねばならない。「マア待て。僕にも突然のことで先のことには判らない。ただ言えることはこれからは軍事国家ではなく文化国家としての道だけが許されるだろう。慌てず落ち着いてじっくり事態の推移を見定めて、先のことを考えようではないか。我々の研究室の仕事は直接的には戦争には関係なく今後も続けて差し支えない。仲々その気になれないだろうが、今までの仕事を続けよう

ではないか。流言に惑わされず、自暴自棄、軽挙もう動は絶対慎まねばならない。」これだけ言うのが精一杯だった。

突然女性の1人がワッと泣き出した。この女性は、つい先日兄さんがサイパンで戦死したと言う公報が入ったばかりであった。もう少し早く終戦になっていたら、兄は死ななくてよかったのにと、考えた瞬間涙がどと溢れ出たのに違いない。戦死の公報がきたときにはまだ慰めようもあったが、戦いに破れたいま、兄の戦死をどう受け止めたらよいか。慰めようがなく途方に暮れた。

また数日経つと若い男性の1人が研究室で刃物のようなものを作っているのを見付けた。

「オイ何をしているんだ」とがめると

「アメリカ兵が来たからこれで突いてやるんです。近所の人はみんな作っています。」

「馬鹿者！なんたることをするか。わしがこの間から言うてることが判らんのか」と一喝して、作りかけのドスを取り上げ、非を順々と論ずるとい一幕もあった。

終戦直後の数日は職員の手相手一杯で、自分のことは考える余裕もなかったが、直後の動揺がやや収まると無性に勉強がしたくなった。連合軍が進駐して来ると大学は閉鎖されるかも知れない。今まで通り研究が続けられるかどうか

か全く判らない。もしそうだとすれば手掛けた研究や勉強を一刻も早く仕遂げたいと言う意欲が心の中で沸き上がるのだった。残された時間は短い。昼間は職員の手で落ち着いて勉強する時間がなく、夜帰ってから必死の思いで勉強した。結果的には連合軍の処置は寛大で、私の研究生生活には格別の干渉も何の変化もなかった。

私はまだ大学院の学生で職員ではなかったのに、大学で終戦時に何が起こったか、知る由もなかったが、当時のことを「京都大学工学部八十年史」その他から多少調べたので紹介することとしよう。

終戦の翌日8月16日には、地方長官並びに学校長宛に「可及的速やかに学徒動員を解除することとし、帰校の上、晴耕雨読を行わせる等貴官において適當の処置をとらるべし。・・・何分の指示があるまで授業を休止せらるべし」との指示が、文部・厚生次官通達の形で発せられた。文中の「晴耕雨読・・・指示があるまで」の部分は「貴官に処置を任せる」との意と解してよい。そう言っておきながら、最後には「授業は休止せよ」と矛盾した指令になっていて、当時の混乱振りが伺われる。さらに8月28日には全国の学校に授業再開の指令が発せられた。

さて16日の次官通達によって、大部分の学校では学生を帰郷させたため、28日になって授業再会を命じられても、一旦帰郷した学生を呼び戻すことは、当時の鉄道が壊滅状態であったことや、敗戦によって日本全体が混乱の極にあるときに上京せよと言っても無理な話で、16日の動員解除から28日の授業再開の指令に至るまでの2週間のギャップは、終戦の混乱にさらに拍車を掛けることになったことは容易に理解できるであろう。

ところが電気教室の鳥養利三郎先生の処置は、未曾有の混乱の中で一段と光っていた。先生は当時教室の最長老であると同時に、学内では工学部長を経て工学研究所長を勤めておられ、学外では軸受研究所、応用科学研究所等の理事長を勤められるなど工学部の重鎮として活躍されていた。先生はその労作「敗戦の痕」の中で終戦時の混乱期についてこのように書いておられる。

「・・・大学当局からは、授業は即時休止して（註：当時夏休みは廃止され授業が行われていた）直ちに家庭へ帰せと通達して来るし、また文部省からは、戦時中の書類と研究報告を焼き捨てると言ってきた。・・・私は文部省及び大学の指令には承服する気持ちにはなれなかった。不謹慎とは思っていたが独自の態度に出ざるを得なかった。・・・配下の全職員を順次

集めて何事が起ころうとも全責任は私が負う。寸時といえども研究を中止してはならぬ。明日以後も、昨日までと同様研究を続けてくれ。また学生に対しても、電気工学科は毎日このまま講義を続けるからと、再三繰り返し述べ、その通り実行させた。・・・昭和22年卒業の学生は、当時動員に駆り出されることなく学内で授業を受けていたが、何人かの学生からもこの話を聞いた。敗戦という過去の歴史にない事態に直面し、混乱の真只中であって、かくも冷静な判断ができたものだ、先生の偉大さに只々頭が下るばかりである。（次号へつづく）

### 京都今昔25年

原田 俊一（昭50年卒）

私は昭和50年（1975年）3月の卒業で、地元の九州電力に就職した。東京支社を除けばほとんど九州内勤務であるが、振り返ってみればこの25年間、京都は心のふるさとであった。昭和50年代の10年間は、7月に円山公園の野外音楽堂で行われる「宵山コンサート」に参加するため、ほとんど毎年京都を訪れている。永六輔や北山修、高石ともやとナターシャ・セブンなどがレギュラーで、これに今は亡きミヤコ蝶々や渥美清、坂本九といったゲストが毎年

入れ替わりで参加していた。学生時代には、京都で活動する高石ともやを中心としたフォークソングに熱中していたため、これを縁とする音楽仲間をはじめ、大学で知り合った妻やその後加わったそれぞれの家族などとともに、年1回の京都での再会を楽しみにしていた。しかし昭和60年代に入るとコンサートもなくなり、転勤や3人の子供たちとの生活に忙しく、また、途中でアメリカや東京での生活も入り、目新しい文化に目を奪われて、いつしか京都から足が遠のいていた。

一番上の息子が中学生になり日本の歴史を学ぶようになると、再び京都が意識にのぼりはじめた。私が中学高校の頃は九州からの修学旅行は京都・奈良が定番で、歴史に興味があるうとなかろうと、誰にも京都や奈良の具体的なイメージが常識としてあった。私の場合は、京都・奈良への修学旅行と高校の歴史教師の影響が大きくて、大学を京都に決めている。ところが、子供たちの代になると、修学旅行先もスキーや沖縄、海外などと多様化し、大人になるまでに東京ディズニーランドには行ってき、清水寺や奈良の大仏は知らないうちが珍しくなくなってきた。このままでは京都を知らずに一生を過ごすことになると思いい、平成5年春、当時住んでいた長崎から家族5人で京都・奈良旅

行に行くことにした。今もJRで運行されている長崎→京都間の寝台特急「あかつき」に乗り、京都は金閣寺や東山周辺、奈良は東大寺や法隆寺といった超有名どころの旅となった。

2度目の京都家族旅行は平成10年4月である。JR京都駅が新しくなつて間もない頃で、「ぶつ飛びの京都駅」として家族の中にたちまち定着した。度肝を抜かれてしまった。単なる鉄道駅だけでなく空港や劇場まであわせ持ったような広大な空間。とにかくその斬新さに圧倒された。昭和50年代コンサート通いの頃はあまり変わらなと感じた京都で、大きく変わったもののひとつだろう。一方で、古都と大都会が混ざりあっているのが京都の魅力でもあり、その点では一貫して変わらないなとも思った。

昨年12月には昭和50年電気系卒の同窓会があり、久しぶりに夫婦で京都を訪れた。昔と変わらぬ同窓生の元気な姿に時を忘れた。そして今年4月、2番目の娘が京都大学総合人間学部に入学したので、改めて大学周辺をゆっくり歩くことができた。変わるもの変わらないもの、いろいろな思いがあり感慨深かった。総合人間学部というのは私たちの頃にはなかった学部で、今は教養部がなくなり、かわりに全学部の学生が入学当初から専門科目を学ぶとともに、主

に総合人間学部が提供する講義も受けるということ、大学のシステムもかなり変わってきているようだ。また、私たちの頃はバリケードや立看板だらけだった構内も、ずいぶん品のいい学生が往来するキャンパスに変わっていた。総合体育館は当時できたばかりであつたが、西部講堂とともに25年の歳月を感じた。大学構内の建物は昔のコンクリートづくりが残る一方で、古い煉瓦づくりの部分を保存しつつ新しいデザインで改築している建物があちこちに見られた。

私の在学当時の下宿は、熊野神社南の聖護院蓮華蔵町にあつた。娘の下宿が近くの聖護院川原町に決まつたので、久しぶりに昔の下宿を訪ねてみた。建物も空気も昔と変わらず自分が学生に戻つたような気がした。卒業前の11月祭で仲間とバンド演奏をすることになり、部屋であたりかまわず大声で練習していたのだが、大家さんも周りの人たちもよく許してくれたものだと、今思うと我ながら恥ずかしい限りだ。大家さんはまたま不在で娘さんが出てこられ、今では下宿をやめているものの部屋はそのままで、80歳を越えるご夫妻はともに健在ということだった。我々の来訪を聞いて、後日娘の下宿先をわざわざ訪ねてこられ、心から喜んでくれたとのことである。私の学生時代は四畳半一

間の下宿で銭湯に通つたものだが、今回下宿探しをしてみると、だいたいバス・トイレ・キッチン・エアコン付きが当たり前のようにあつた。しかし、1階に住んでいる大家さん老夫婦や近所の自転車屋さんなどと話していると、昔と変わらず学生を大事にしてくれる京都の伝統を感じた。

ところで話は全く変わるが、九州は今、プロ野球の福岡ダイエーホークスが元気である。在学当時の昭和40年代後半は、九州の西鉄ライオンズが球団身売りし低迷の極致にあつた。そんな中でもKB S近畿放送のラジオ深夜放送で、諸口あきらがライオンズを応援していたのが懐かしい。その後西武に変わり本拠地も九州から所沢に移つたため、約10年間地元チームがないというつらい経験もした。そこに、関西を本拠地とする南海ホークスが福岡ダイエーホークスに生まれ変わって福岡にやつてきたのが12年前。今度は決して九州から逃げられないようにと必死でホークスを応援してきた。6年前に私の在学当時には国民的スターだった王監督を迎え、就任後のさまざまな苦難を乗り越えて、昨年ついに2連覇を達成。今若々しく力強いチームとして福岡の町にすっかり根付いているのを見ると、まさに隔世の感がある。阪神タイガース情報があふれる関西に行つた娘に、携帯電話のメールで福岡

ダイエーホークス勝利の喜びを伝える楽しみを味わっていると、やはりこの25年間で、時代も大きく変わったものだと感じている。

## 初「そば打ち体験」

木元 伸一(平元年卒)

ゴールデンウィークの前半、家族でサホロへ出掛けた。サホロと言つてもほとんどの方がピンと来ないでしょうが、北海道日高山脈の北端の東側に位置する新得町にある緑に囲まれたリゾートで、夏はゴルフ、ラフティング、冬はスキー、犬ぞりツアーなどが楽しめる。私が住む札幌からは、約200km、車で3時間半といったところである。

本来であれば、屋外アクティビティを楽しむつもりであつたが、その頃は雪はほとんど消えていたもののまだ時期が早く結局ホテル内で妻と「そば打ち」体験に挑戦した。

この新得町はそばの名産地であり、良質なそばの生産地で全国一に選ばれたこともある。この新得産のそば粉を使つてのそば打ちである。指導して下さる先生は、和服がよく似合い、いかにもそば打ち名人といった風情のある方だった。

材料は二人分でそば粉192g、小麦粉48g、水100cc程度、打ち粉適

量でいわゆる「二八」のそばである。水の量はその日の天候やそば粉の状態で2%程度変えているとのこと。まさに職人の技と言つた所である。道具はこね鉢、のし台、麵棒、麺きり包丁を使用する。その一

まず、そば粉と小麦粉をこね鉢でよく混ぜる。この時、そば粉は熱に敏感なので指先のみを使い、慎重に進める。その二

粉で小山を作り真ん中をくぼませる。そこに水を入れて混ぜ合わせながら一つにまとめる(「くくり」)。この辺りは、感覚は粘土遊びに近いものがある。その三

「練り」。そば粉に粘りを引き出す。全体重を使つて練る。この辺も遊び感覚でなかなか楽しい。次に「菊練り」、「へそ出し」といった空気抜きの工程を経て手のひらで厚みのある円形にまとめるのだが、勝手がよく分ならず少々不安になる。その四

そばを薄く延ばす「のし」の作業に入る。「のし」は手の平だけを使う「地のし」、そして「丸だし」、「四つだし」、「本のし」と進む。私たちのそばは、「地のし」の段階で乾きのために端が紙粘土のように細かいひびが入りはじめ最後までたどり着けるか不安感がよぎつた。「丸だし」は両手の親



指の付け根のあたりと指先で打ち粉をふった麺棒を滑らせ、丸いそばを薄く延ばしていく作業である。はじめはなかなかうまく麺棒が滑らないのだが、じきにコツを覚えスムーズに麺棒が転がるようになって、ちよつとした職人気分を味わえる。「四つだし」は、ある程度薄く丸く延びたそばを麺棒に巻き付け転がしながら延ばす。広げてさらに90度回転させて同じように伸ばすと不思議なことにこれで丸かったそばが四角くなる。「本のし」は広げた麺をさらに均一に延ばすのだが、均一に延ばすのは、結構難しい。

その五  
のばした麺に打ち粉をたっぷり振りながら折たたんで好みに応じて切る。この時点でそばがかなり乾燥していてもよく切らないと細切れになりそうだったため、切るのは妻に任せた。

茹でるのはスタッフの方にお願ひした。あの麺では丁寧に茹でないと崩れて細切れになってしまうだろう。テーブルについて待つこと約10分、ざるに乗ったそばが運ばれてきた。期待しながら一口食べてみる。なかなかいける(そばつゆでごまかされているかもしれない)が歯ごたえはかなり固めである。新得そばが全体に固めらしい(街で食べたのがそうだった)。先生が打ったそばも試食させていただいた。同じように打ったはず

なのだが、やはり歯ごたえがあったておいしい。当然といえば当然なのだが、不思議なものである。

今回初めての体験だったが、道具がそろえばとりあえず手軽にできそうに家族で楽しみながら作ることもできそうだが、奥が深そうではまっつてしまうと大変なことがありそうである。

皆様も一度体験してみたいかがでしょうか。

### 同窓会だより

#### 第1回41洛友関東ゴルフ会

平成13年4月15日(日)に太平洋ゴルフクラブ相模コースにて、首記のゴルフ会を開催しました。昭和41年3月卒業で関東に在住



の江上、織田、菊井、久米、千本、武田、松本、望月の8人が参加しました。当日の天候は添付写真の通り快晴で、和気藹々の内に楽しいゴルフ会を開催することが出来ました。ハンデイは自己申告としまして、成績はクロスで80台から120台まで千差万別ですが、千本が優勝、菊井が準優勝、久米がブービー賞を取りました。

次回は千本と久米が幹事となり、8月22日(水)に富士カントリークラブで開催することになっています。

今回参加できなかった方、また初心者の方も、次回には是非とも参加して頂きたい、ご連絡をお待ちしています。連絡は次回幹事の下記Emailまでお願いします。

「今回の幹事は江上と松本でした。」  
千本: sem@eacesss.netまたは  
久米: Ichiro\_Kume@mitsubishi-cable.co.jp

江上 貞夫(昭和41年卒) 記



### 獅子の会からのお知らせ

昭和44年卒同窓会では、メンバーリストを作り、相互の連絡や名簿の整備などを行っております。

電子メールのアドレスを未登録の方は、  
kozo@kurasc.kyoto-u.ac.jp  
までご連絡をお願いします。

橋本 弘蔵(昭和44年卒) 記

### 本部だより

#### 本部総会報告

平成13年度本部総会は6月16日(土)、東京目黒八芳園にて開催され、東京支部会員約80名と本部からは近藤会長、宅間副会長、池上副会長、木村幹事、吉田幹事等が出席された。近藤会長の挨拶に引き続き各議題の説明と審議に入った。先ず事務局より平成12年度の事業報告と収支決算報告が行われ、全会一致で承認されました。

表(1)は承認された平成12年度の決算報告書で、会費納入の落込み約73万円(244名分)の減収と会員原簿管理費のプログラム変更分の支出約30万円の増加により、次年度への繰越額は約21万円の増加にとどまった。

続いて平成13年度の事業計画案

と収支予算案についても事務局の説明の後、承認された。表(2)は平成年度予算を示しましたが、本年度より会報の発行回数を従来の年4回にもどすことと、名簿広告費用の負担額計算方法の変更と支部交付金が各支部に一律10万円(2年間)交付となりました。

次に、今年は会則により役員任期満了に伴う会長、副会長の改選が行われました。(新役員は別項をご参照下さい) 続いて木村幹事より、電気百周年記念事業実行委員会の年次会計報告と賛助会員の参加拡大の要請が行われた。最後に幹事の吉田教授から電気系教室の近況(特に桂キャンパスへの移転計画)報告等が行われ総会は閉会した。なお桂キャンパスの詳細は教室だよりを参照下さい。

事務局 記

### 洛友会役員改選通知

平成13年度本部総会で会長、副会長が改選されました。退任および新任の本部役員は次の方々です。

会長	昭18	近藤	文治(留)
副会長	昭19	大嶋	幸一(留)
〃	昭22	池上	文夫(留)
〃	推薦	宅間	董留(教室)
〃	大13	芦原	義重(留)
〃	昭6	上西	亮二(留)
顧問	昭12	安田振之助	(新)

幹事  
 昭16 松合健一郎(留)  
 昭16 森本 芳夫(留)  
 昭5 河本 勝寿(逝去)  
 講習 神戸 俊夫(留)  
 昭30 木村 磐根(留)  
 昭41 荒木 光彦(退・教室)  
 昭46 吉田 進(留・教室)  
 昭43 石川 順三(新・教室)  
 推薦 松本 博(留)

表(2) 平成13年度収支予算  
 (平成13年4月1日～平成14年3月31日)

1. 収入の部 (単位 円)			
科目	予算額	平成12年度実績	備考
会費(学部)	9,060,000	8,718,000	3,020名分 (@3,000円/人)
(講習所)	120,000	147,000	40名分(〃)
預金利子	500	1,025	
広告掲載料	140,000	140,000	会報新年号140千円のみ
雑収入	0	0	
収入小計	12,420,500	9,006,025	
前年度繰越金	12,474,914	12,261,925	
合計	24,895,414	21,267,950	

表(1) 平成12年度収支決算報告書  
 (平成12年4月1日～平成13年3月31日)

1. 収入の部 (単位 円)			
科目	予算額	決算額	備考
会費(学部)	9,450,000	8,718,000	2,906名分 (@3,000円/人)
(講習所)	150,000	147,000	49名分(〃)
預金利子	500	1,025	
広告掲載料	140,000	140,000	会報掲載新年号掲載分(14社)
雑収入	0	0	
収入小計	9,740,500	9,006,025	
前年度繰越金	12,261,925	12,261,925	
合計	22,002,425	21,267,950	

2. 支出の部 (単位 円)			
科目	予算額	平成12年度実績	備考
名簿編集費	180,000	0	H9年7,728千円(4,400部)
電算機処理費	900,000	0	H11年7,117〃(4,450部)
印刷費	4,770,000	0	
発送費	1,300,000	0	
会報編集費	0	0	
印刷費	680,000	527,100	毎号5,500部(年間4回)
発送費	2,174,000	1,623,862	〃
備品費	0	0	
通信費	100,000	98,725	
会員原簿管理費	850,000	1,023,796	電算機処理費(FD製作4回含む)
会合費	350,000	415,889	役員会費(含む旅費)
総会費	300,000	300,000	
集金費	200,000	185,490	振込手数料等
消耗費	400,000	399,914	振込用紙、封筒等
旅費	300,000	238,820	支部総会出席旅費等
懇話会補助費	250,000	250,000	
支部交付金	900,000	2,523,342	(※H14年度は0)
事務人件費	1,200,000	1,200,000	応研謝礼
雑費	50,000	6,098	
予備費	0	0	
支出小計	14,904,000	8,793,036	
次年度繰越金	9,991,414	12,474,914	
合計	24,895,414	21,267,950	

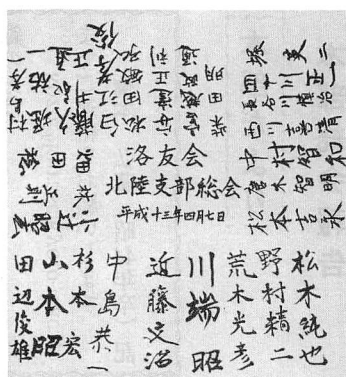
2. 支出の部 (単位 円)			
科目	予算額	決算額	備考
名簿編集費	0	0	
電算機処理費	0	0	
印刷費	0	0	
発送費	0	0	
会報編集費	0	0	
印刷費	500,000	527,100	5,500部(A4版)、3回発行
発送費	1,650,000	1,623,862	〃
備品費	0	0	
通信費	100,000	98,725	
会員原簿管理費	700,000	1,023,796	電算機処理費(プログラム変更含む)
会合費	350,000	415,889	役員会費、(旅費含む)
総会費	300,000	300,000	
集金費	200,000	185,490	振込手数料等
消耗費	350,000	399,914	振込用紙、封筒等
旅費	350,000	238,820	支部総会出席旅費等
懇話会補助費	250,000	250,000	
支部交付金	2,523,342	2,523,342	
事務人件費	1,200,000	1,200,000	応研謝礼
雑費	0	6,098	
予備費	0	0	
支出小計	8,473,342	8,793,036	
次年度繰越金	13,529,083	12,474,914	
合計	22,002,425	21,267,950	

平成13年4月26日、応用科学研究所において、領収書、帳簿等関係書類を慎重に監査し、支出及び決算が適正であると認めました。  
 幹事 荒木 光彦

支部だより

北陸支部総会報告  
 平成13年4月7日(土) 富山市「五万石本店」において、平成13年度北陸支部総会を開催いたしました。本部からは近藤文治会長、教室からは荒木光彦先生をお迎え

し、合計28名が出席しました。中島支部長の挨拶で始まった総会は、近藤会長の挨拶へと続き、最近の会員と会費納入状況についてお話を伺いました。次に荒木先生から、教室の近況として桂キヤバスへの移転計画について、スケジュール、配置計画、移転にあたっての課題等詳しくご説明いただきました。その後、支部近況報告



会計報告と進み、役員改選では現役員がそのまま留任となりました。総会終了後の懇親会は、今春富山県立大学の学長を退官された川端先生の送別会とその後を引き継がれて学長に就任された中島先生

九州支部総会報告

村島 孝一(昭61年卒) 記

の祝賀会も兼ねて実施されました。近くを流れる松川沿いの満開の桜、日本海の幸を肴に富山のおいしい地酒に舌鼓をうちながら、先生方や先輩・後輩、友人と酒を酌み交わして歓談し、楽しい一時を過ごしました。最後に逍遙の歌と琵琶湖周航の歌を合唱し、万歳で散会となりました。  
 翌日、近藤会長は世界遺産となっている五箇山の合掌造り等をご覧になった後無事お帰りになりました。

去る5月11日(金)福岡市博多駅前ホテルステーションプラザにて、九州支部総会が行われました。本部から近藤会長をお招きし、最近の情勢、特に、桂キヤバスへの移転について、お伝えいただきました。私は、吉田からの移転を寂しいと強く思う一人であるが、時は移ろいゆき、桂キヤバス輩出の会員が、引き続き、歴史を刻んでいくことを確信しています。  
 総会後は、和やかに宴へと移っていききました。重鎮の安田大先輩(S12年卒)を始めとした元気印の諸先輩が侃々諤々の議論を交わすお姿は、何と頼もしく写ることか。そして、(ちよつと失礼な言



しました。支部長から本部の資料などの要点について説明した外には特別な議題は無く、役員改選は次回の総会とし、引続き懇親会に入った。今回の出席9名。写真で紹介いたします。前列左から谷村、中山、池内、西村、芝山、後列左から福井、土橋、石川、木元。最も若い石川さんは、遠路の道東からの初の参加であり大歓迎でした。皆さんの今昔に亘る話題は尽きず、いつものことながら感心するのは、古い事柄について良く記憶している人が楽しませてくれること。

最年長の西村さんはペースメーカーを入れたばかりだが元気になるのを大変嬉しく思い、俳句を一つお願いした。

「舞い降りて雨だれとなる春の雪」  
「福寿草朽葉持ち上げ芽を出しぬ」  
北国の春の到来を詠まれた。当日の気候は、駆け足でやってきた春が、甞近しと感じる心地良い日和



### 北海道支部総会報告

気の早い話ですが、まだ参加されたことのない方、是非一度この雰囲気を経験されてみては如何でしょうか。

市川 憲一（平5年卒）記

平成5年5月12日（土）に札幌セシニチュリーローヤルホテルで開催

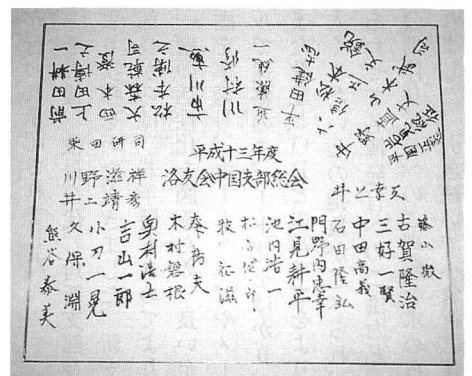


### 中国支部総会報告

もう一つ付け加えますと、昨春開設の公立はこたて未来大学教授として函館に住まわれている上田先生には、次の支部総会でお話を頂けるよう期待しております。

芝山 龍一（昭28年卒）記

平成13年5月18日（金）広島全日空ホテルにおいて第48回目となる平成13年度洛友会中国支部総会が開催されました。総会には本部から木村先生、教室から奥村先生



をお迎えし、中国地方各地から6名の会員の参加を得て盛大に開催されました。

総会は司会の中野幹事の開会宣言で開会されました。池内支部長より挨拶をいただき、引続いて支部事務局から支部会員異動状況、平成12年度支部活動状況及び平成13年度活動計画を報告、会計決算、予算案について説明を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。

続いて木村先生より洛友会本部の近況について、奥村先生より大学の近況について、それぞれお話をいただき、当初の議事を全て順調に終了し、中野幹事の閉会宣言で支部総会を終了しました。

写場での記念撮影の後、全日空ホテル最上階の懇親会会場へと場所を移し支部恒例の懇親会の始まりとなりました。ホテルの最上階からの広島島の夜景を眺めながら、

支部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で会が進行し大いに懇親を深めた後、最後には奥村先生の挨拶と乾杯の音頭で支部懇親会の閉会となりました。

私自身、2年間中国支部を離れていたこともあり、大変楽しい一日を過ごさせていただきました。今回残念ながら参加していただけなかった会員の皆様も来年度はぜひ参加していただきたいと存じます。

柴田 研司（平4年卒）記

### 四国支部総会報告

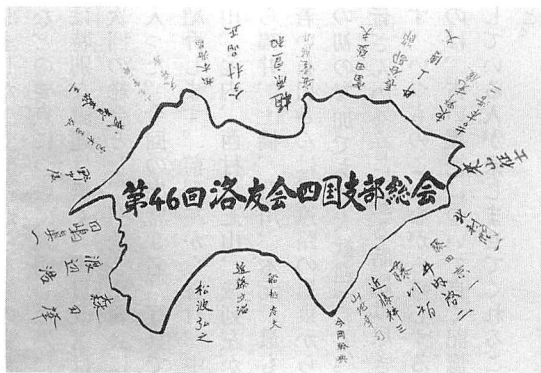
5月25日（金）、高松市内の料亭「新常磐」において第46回洛友会四国支部総会が開催されました。

本部から近藤文治会長、教室から松波教授のご出席を頂き、四国内からは27名の会員が集まりました。

総会は近藤四国支部長（昭和28年卒）の挨拶で始まり、世界的な大競争のなか、日本の産業界が中国や東南アジア製の製品による価格破壊の打撃を受けているが、この国際競争に耐え残った企業だけが日本の産業を支えてゆくことになるだろう。日本は工業によって稼いだ外貨で成り立っている国であるから、若い人ががんばっても

らって外国に買ってもらえる製品を作ってもらうことを望む旨の話がありました。

次に近藤会長よりご挨拶を頂きました。まず、本部の動向について、一昨年は広告収入、会費収入が好調であったため各支部の収入が増えているが、今後会費収入は減る可能性が高いので会計幹事はその点を認識してもらいたいとお話とともに、現在京都大学は大変な変革期にあるが、洛友会もまた出席率や会費納入率の低下が見



られるなど今後のありかたを考慮すべき難しい時期にあるとのご感想をお聞かせ頂きました。また、20世紀は大変技術の発達した世紀であったが、21世紀の科学技術の進歩はもっと早いであろう。これからの時代を支えてゆく若い皆様のご奮闘を願うとのお言葉をいただきました。

松波先生からは、大学院が3つの研究科に分かれ、教室の構造が複雑になるとともに、講座が増えて教室の定員が減ったことなどをご紹介頂きました。また、就職の担当をしている立場から見ると、昔は推薦をすれば採用された時代であったが、今は企業側が選ぶという姿勢に変わってきており、企業の生き残りを賭けて人材を採用しようとしているのを感じさせられることや、今の若い人たちは十

分な力をもっており、企業側も早く若い人たちの心の琴線を刺激し、やる気を起こさせることが必要なのではないかとのご意見を頂きました。また桂キャンパス建設の進捗状況や、京都市の協力により、市内にキャンパスを維持することができたことなどをご紹介頂きました。

会務報告では、四国支部における転入者および、転出者が紹介されました。慶弔関係では昨年度に結婚された植原宣一氏より、諸先輩を見習いながら公私ともにがんばってゆきたいとの挨拶がありました。また、前年度会計報告、今年度予算案提案については、満場一致で承認されました。

総会終了の後、懇親会に移り、安堂勝年先輩(旧職員)の乾杯音頭に始まり、先生方や久しぶりの友人と酒を酌み交わしながらの歓談や、先輩方が教室におられた頃の話や、先輩方などしているうち、楽しいひとときはあつと言う間に過ぎてゆきました。恒例の全員の寄せ書きが完成したところで、全員が肩を組み、これも恒例となりました「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の合唱で懇親会を締めくくりました。

その後、松波先生を始め有志一同は街に繰り出し、時を忘れて話に花が咲き、深夜まで親交を深めました。

東野 克俊(平4年卒)記

### 東京支部総会 並びに講演会報告

平成13年6月16日(土)に、例年通り目黒の八芳園にて、東京支部の支部総会を実施しました。昭和9年卒業の大先輩から平成11年卒まで総勢80名余の会員の参加があり、本部からは近藤文治会長、池上文夫副会長、宅間董副会長、木村磐根幹事、吉田進幹事、松本博幹事を来賓としてお迎えしました。

支部総会は、午後2時から川本支部長による挨拶で始まり、昨年度一年、会員の皆様の支援により活発な活動が行えたことへのお礼が述べられました。また今後若年層も満足できるような運営が必要である点も指摘されました。

引き続き大橋総務幹事より、平成12年度の行事、予算・決算などの報告および次期役員候補紹介が行われ承認されました。

その後、役員交代し角新支部長より挨拶をいただきました。新支部長からは、若年層も含めてより一層の活性化を図るため、良い企画を準備し、ホームページやメールで連絡のスピード化をはかり、また教室とOBとのパイプをより大きくしたいとの抱負が述べられ、あわせて名簿発行へのご協力と、会則作り検討へのご理解を求められました。引き続き小倉新総務



幹事より、平成13年度の行事、予算計画が説明され承認されました。その後平成12年度に米寿・喜寿を迎えられた方々(米寿10名、喜寿14名)のお祝いを行い、出席されていた河辺様(S16年卒)、武田様(S21年卒)に代表として、それぞれ米寿、喜寿のお祝いの目録が手渡されました。

支部総会に続いて、午後3時過ぎから本部総会が開催され、近藤会長が挨拶を述べられ、本部松本様が事業報告、決算・予算計画を述べられたあと、吉田教授より桂キャンパス計画など電気系教室の現況が紹介されました。

同日、同会場で、午後4時半より洛友会の会員でもある、イー・アクセス(株)CEO千本倅生氏をお招きし、講演会を開催しました。「ブロードバンド時代の到来と起業家精神」というテーマに対し、

80余名の参加を得、いま話題のテーマへの関心の高さを示しました。開会に際し、角支部長より、千本倅生氏の略歴の紹介、本講演会参加への感謝が述べられました。続いて千本氏より1時間半に亘り力のこもった講演が行われました。千本氏は、日本のインターネット普及遅れの状況と原因を説明されたあと、イー・アクセスを設立した経緯を述べられ、しっかりとした経営基盤とコア・コンピュータのある企業として、スピード感をもって総合的なブロードバンドIP通信サービスを推し進めていると述べられました。

午後6時より恒例の懇親会に移りました。和田新副支部長、宅間教授のご挨拶の後、池上副会長の乾杯ご発声で始まり、和やかな談笑の時間を過ごしました。千本氏も講演の前後に携帯電話で仕事の連絡を取られる忙しさにも係らず懇親会にお付き合いいただきました。最後は、柴沼新会計幹事の中締めで午後7時半頃散会しました。

※なお来年度も、6月16日(日)に八芳園で開催の予定です。

柴沼敏郎(昭58年卒)記

**東京支部  
平成12年度見学会報告**

朝は寒さを感じたものの、良く



晴れ渡り、3月16日は絶好の行楽日和となりました。平成12年度の見学会は、75名の参加者を迎え、現在移动通信分野にて世界をリードするNTT DoCoMo R&D センタ(神奈川県横須賀市)を訪問しました。

8時30分に横浜駅西口天理ビル前に集合しました。初めての集合場所であつ横浜駅前で数少ないバス停車可能場所、混雑が常態であるにもかかわらず、皆様何とかご集合いただき、8時45分に東洋観光のバス2台にて出発しました。横浜横須賀道路を通り9時30分過ぎには、YRP内にあるNTT DoCoMo R&Dセンタに到着しました。

R&Dセンタでは、まずプレゼンテーションホールにて洛友会メンバーでもある総務部の廣田 哲夫様が我々をお迎え下さり、同センタの沿革をご説明いただきました。本R&Dセンタはこれまで各地区に分散していた研究所機能をここYRPに集約させて98年より活動を開始されました。現在ではさらに研究機能拡充のため、隣接地にもう一棟のビルを建設中で、完成後は1000人規模の研究開発体制になるとのことでした。

YRP地区には、NTT DoCoMo R&Dセンタの他に多くの移动通信を主体とする研究開発設備があり、PanasonicやEricsson、Nokiaなど

どの多くの企業がこの地で研究開発活動を行っています。

見学は25名ずつ3班に分かれて行われました。マルチメディア評価室では、数多くの音響特性を実現できるよう工夫された空間であり、そこにて恐竜のコンピュータグラフィックスをはじめとする興味深い映像を楽しみました。

展示室では、これまでの移动通信の発展の系譜がわかるよう、端末を中心とする多くの製品が展示されていきました。中でも本年5月から開始されるIMT-2000の試作開発設備も展示されており、2Mbit/sにて高品質画像を伝送する様子や、想定されるマルチメディア端末のモックアップが展示され、多くの人々の関心を引いていきました。筆者にはすでに70年の万国博覧会にて展示(使用?)されたとある今となつては大型の携帯電話器が印象深く感じられました。

その他には、想定される地震に備え免震構造を支える地下のダンパ(?)や車両も格納して測定可能な大型の電波無響室も訪問させていただきました。残念ながら電波無響室はたまたま実験中というこ

とで入れませんでした。丁寧な女性3名の案内も含め、総じて素晴らしいオーガナイズされた見学でした。受付前にはようこそ洛友会様のディスプレイも表示頂いておりました。

昼には場所を三崎港に移し、「三崎館本店」にてマグロ料理を楽しみました。三崎港はつとにマグロの水揚げで知られた港ですが、当地では普段は食べられない部分をも料理して出すとのこと、この日は刺身の他に皮とか胃袋とかが出されました。(かぶと焼きが有名ですが予算の関係上割愛しました)。食後は、三崎港周辺を散策し、思い思いに土産をみて購入しました。多くの方が冷凍マグロなどを購入しておられました。港には大きな魚市場があり、早朝には活発なセリが行われるのが想像できました。

帰路は京急三崎口を經由して横浜駅まで向かい、3時30分過ぎに東口に到着して無事解散いたしました。末筆ですが、快くお迎えいただいたNTT DoCoMo R&Dセンタの関係各位に深く感謝いたします。また旅行会の無事遂行にご尽力いただいた「東洋観光バス」のみなさまに感謝します。幹事としては、平成13年度も魅力ある企画を出して行きたいと思っておりますのでどうかご参加のほどよろしく申し上げます。

**関西支部総会報告**

平成13年6月23日(土)、ホテル京阪京都にて関西支部総会を開催しました。今年、昭和14年

卒の大先輩から平成7年卒業の若年会員まで58名の参加をいただきました。

支部総会では田中支部長より「厳しい経済環境や社会情勢が変化していく中で電気・電子技術者の重要性が増し、洛友会活動での横の繋がりが重要になってくる。」との挨拶をされました。議事は平成12年度事業及び決算報告、平成13年度事業計画と予算編成、支部役員改選について審議され、満場一致で承認されました。平成13年度の新役員は

支部長 伊藤 俊一(昭34卒)  
副支部長 皆川 長也(昭35卒)  
総務幹事 八木 誠(昭47卒)  
会計幹事 美濃 由明(昭56卒)  
の各氏です。なお、今年の関西支部の家族見学会は10月21日(日)にユニバーサル・スタジオ・ジャパンの予定です。



伊藤新支部長から新役員の紹介と「一年間洛友会に貢献したい。会員の皆様が楽しくなるような会にして活性化を図りたい。ホームページも充実したい。」とのご挨拶をいただきました。その後教室から石川教授に、電気系教室の現状報告として、国際融合創造センターの新設や人事異動、求人状況、パンフレットを用いての桂キャンパス移転の報告をいただきました。

支部総会終了後懇親会を開催し、近藤会長から「社会が変革の時期を迎え、桂キャンパスへの移転など母校も変化していく。会員の皆さんも是非がんばって欲しい。」とのご挨拶をいただきました。田中前支部長のご発声により乾杯が執り行われ、グラスを片手に旧交を温めました。途中伊藤支部長のご挨拶をいただき、和気あいあいとご歓談いただきました。か、予定の1時間30分はアツという間に過ぎ、最後に関西支部では恒例となっている「洛友会の歌」を西台惇氏(昭32卒)のリードにより全員で斉唱しました。締め挨拶として大嶋副会長から「クエン酸を飲んで糖尿病にならない秘訣」を披露いただき、来年の再会を誓うの散会となりました。

当日の様子は関西支部ホームページ(<http://www.kisweb.ne.jp/rakuyu/>)も参照下さい。

水谷 實(昭59年卒)記

### 第75回関西支部ゴルフ競技会報告

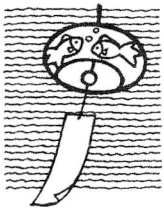
第75回関西支部ゴルフ競技会が平成13年5月27日(日)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は爽やかな風の中、昭和25年卒の奥村徹氏を筆頭に、合計27名(うちシニアの部7名)が競技に汗を流しました。結果は次の通りです。

- (一般の部)
  - 優勝 浅野 尚(昭37年卒)
  - 2位 戸所 義博(昭45年卒)
  - 3位 上塚 克巳(昭40年卒)
- (シニアの部)
  - 優勝 西村 寅雄(昭33年卒)
  - 2位 吹沢 直温(昭30年卒)
  - 3位 中堀 増夫(昭30年卒)

〔第76回競技会のご案内〕  
平成13年9月30日(日)  
於 武庫ノ台ゴルフコース  
多数のご参加をお待ちしております。

(連絡先)  
関西電力株  
八木 誠(昭47年卒)  
一木 将人(平7年卒)  
(TEL) 06-7501-0356



### 事務局だより

平成14・15年度用改訂版名簿の発行について平成13年11月下旬に名簿を発行し、平成12年度・13年度会費を納付された方には名簿をお送りいたします。

現名簿の記載事項に変更のある方は、名簿に綴込みの「はがき」または電話・ファックス等にてお知らせ下さい。締切りは8月5日となっております。より正確な名簿とするために、会員各位のご協力をお願いいたします。

### 編集後記

暑中お見舞い申し上げます。梅雨が明けると夏本番。盆地特有の暑い京都ですが、目下祇園祭り一色で盛り上がっています。今春大阪で開業したU・S・J(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)効果で京都・奈良への観光客が増加、修学旅行先としても見直されつつあるようで街中は活況です。

今月号には会員の皆様の関心が高いと思われる「桂キャンパス」について、電気系移転ワーキンググループ委員長の奥村浩士教授にご寄稿いただきました。平成15年

から順次移転が始まるようですが、開校が待ち遠しい感じですが、7月末には参議院選挙が行われますが、小泉内閣の誕生と高い支持率を背景に暑い季節にホットな選挙戦が予想されます。目下のデフレスパイラルを抑止し、景気回復基調への具体策が早期に打出してほしいものです。

本年2月開催の役員会で、会報の発行を従来の年4回に戻す案が承認され、今年6月の総会で予算案が承認されました。会員諸氏からのご寄稿(特に若い会員の方)をお待ちしております。

松本 博記

### 計報

講大13	茶川 恭助	12	8
昭5	真壁 昌一	13	2
講昭9	関谷 秀雄	13	3
講昭11	柄本 方毅		1
昭14	田中 哲郎	13	2
昭18	角田 寛	13	5
昭21	林 唯一	13	1
昭22	中島 達二	13	3
昭22	松田 正彦		18
昭22	都木 周作	13	1
昭23	渡部 倫寧	12	9
昭24	梅名 茂男	13	4
昭25	佐分利 治	13	5
昭25	忠末 裕治	12	11
昭27		22	4

以上の方々のご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。